

復興にかける ③

地域づくりが仕事もつくる



左から内田卓磨さん、智貴さん、内海明美さん。完成間近の共同食堂「さんさカフェ」に集まった＝宮城県南三陸町

8〜10畳のプレハブ4棟を組み合わせた仮設店舗だが、料理やカウンターの雰囲気は本格的だ。オープンには、今月29日の予定。スタッフ4人が、ここで働く。

宮城県南三陸町で避難所を運営した被災者らが再び力を合わせ、仕事の場、そして住民の交流の場としてつくった「共同食堂」だ。メニューづくりや内装の仕上げが佳境に入っている。

開店準備の中心となったのは内田卓磨さん(40)、智貴さん(36)の兄弟と、内海明美さん(40)。3人は、町内の志津川高校避難所で炊き出しや物資配布のまとめ役として活動した。

内田さん兄弟は自宅に加え、経営していた食堂とバー

も津波で流された。内海さんも町職員の夫、直基さん(53)を失い、家も流された。2級建築士の資格を持ち設計事務所に勤めていたが、解雇された。

子ども2人を育てる内海さんには、糧となる仕事が必要だ。復興需要で建築関係の資格所有者の求人は多いが、内海さんは、あえて共同食堂で働く道を選んだ。

避難所は8月末に閉じ、被災者は各地の仮設住宅に分かれた。だからこそ、地域住民がつながりを保つため、気軽が集まれる拠点がほしい。だが、今の町内には、そういう場所がない。

3人は仲間たちと「M3R(南三陸)Iabc」という住民団体をつくり、議論を重ねた。「共同食堂」は、支援

交流できるカフェを ■ 仮設支援員は被災者

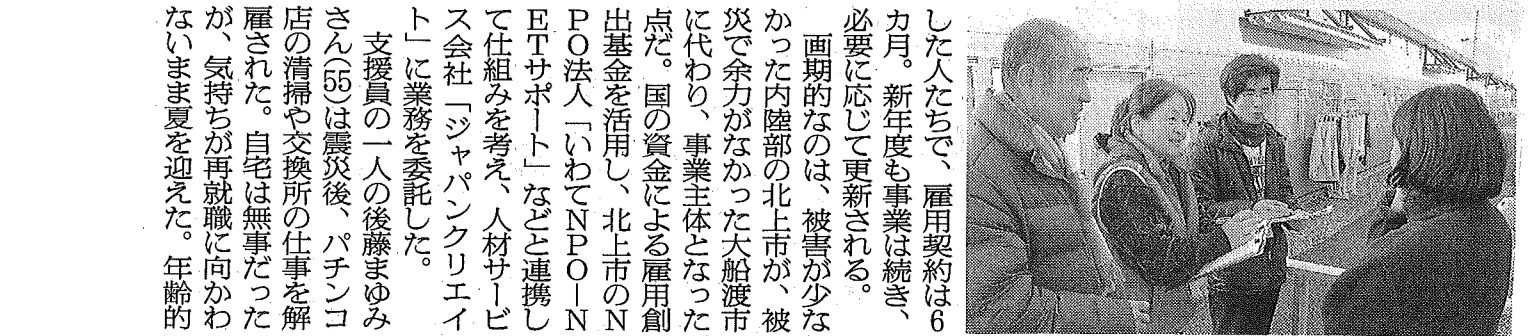
を続けるボランティア団体「名無しの震災救援団」が提案し、昨年から資金集めや場所選びを進めた。店名は「さんさカフェ」だ。避難所から交流が続く石垣島出身のバンド「BEGIN」が考えてくれた。祝宴で歌われる宮城民謡「さんさ時雨」と、沖繩の魔よけ飾り「サン」にちなむ。内海さんは「みんなで地域のこれからの語り合う場にできれば」と願いを話す。

東日本大震災の被災者は今も、33万人以上が元の住まいを離れて暮らす。暮らして地域の再生につながる事業の実現は、雇用にもつながる。

「食」を通じた取り組みは、ほかにも多い。仮設住宅などへの配食サービスを始め被災者もいる。また、仮設住宅での孤独死が問題となった阪神大震災の教訓から、高齢者の見守りや行政との橋渡し役として、自治体などが被災者を雇用する動きも広がる。

岩手県大船渡市には37カ所に約1800戸の仮設住宅がある。昨年9月、仮設住宅支援員70人、地区マネジャー7人、要望などを受けるコールセンター担当4人の計81人が採用された。震災などで失業

した人たちで、雇用契約は6カ月。新年度も事業は続き、必要に応じて更新される。画期的なのは、被害が少なかった内陸部の北上市が、被災で余力がなかった大船渡市に代わり、事業主体となった点だ。国の資金による雇用創出基金を活用し、北上市のNPO法人「いわてNPOIN ETサポート」などと連携して仕組みを考え、人材サービス会社「ジャパンクリエイティブ」に業務を委託した。



仮設住宅の住民に声をかけ、困り事はないか聞く。左から及川宗夫さん、後藤まゆみさん、古澤大樹さん。岩手県大船渡市

に難しいとも思っていた。そんな時、おばから話を聞いて面接を受けた。働き始めると、高齢者への声かけなど、自分のような女性に向けた仕事だと感じる。後藤さんとペアを組む古澤大樹さん(34)は自身も仮設住宅で暮らす。震災当時はパソコンの職業訓練を受けていた。訓練は修了したが、成果を生かせる求人は少ない。次の一歩を模索中だ。

2人の上司に当たる地区マネジャーの及川宗夫さん(61)は、この地域でスーパーマーケットを展開する有力企業「マイヤ」の元取締役。「地の再興の役に立てるなら」と応募した。

視線の先には「仮設後」の地域がある。今もただ生活を支えるだけでなく、手芸教室などのイベントを仕掛け、住民同士のつながりを深めている。「力を合わせて立ち上げる下地づくりです。特に、若い世代に期待しています」

(江口悟)